

# 南方（南洋諸島）

## パラオ島の想い出

京都府 和久井 正 雄

私の父は群馬県前橋市で建築請負業をやっていたが失敗して、大阪の港区に引っ越しましたので、兵隊検査は群馬県前橋市で受け、昭和十八（一九四三）年二月十日、群馬県高崎市第十四師団歩兵第十五連隊の大隊砲小隊に入隊しました。

高崎には三十五日間ただけで満州チチハルに駐屯している満州第四十六部隊（第十四師団）の歩兵第十五連隊に入り、零下五〇度の酷寒の中で

初年兵の一期の検閲に向けての猛訓練が始まりました。

大隊砲分隊は砲一門に十五人の兵隊の編成です。体格の大きい兵隊ばかりでした。

入隊時の家族構成は、父、母、姉、私、妹二人の六人でしたが、父は海南島へ軍属として出掛けだったので私の渡満には間に合わず、会うことはできませんでした。

第十四師団の冬季演習は激しいことで有名で死者が出る程過酷なものでしたが、普段きびしい古年次兵が初年兵の銃を担って救ったりしてくれるので大変助かりました。

内務班にはノモンハンの生き残りの古兵がたむろしていて上級者も敬遠していました。「整備兵」

と呼んでいました。なぜ「整備兵」と呼ぶのか判りませんが何の仕事もせずブラブラしていました。

一期の検閲が終わると、それぞれが特業教育に就くのですが、私は人事係准尉から衛生兵教育を受けるように言われ、チチハル陸軍病院で衛生兵教育を受け、中隊付き衛生兵となりました。

衛生兵は武器として拳銃を携帯（五発回転式）することになり、小銃に較べると格段に軽く楽になりましたが、演習で落伍した兵隊の介抱をする段になると、その兵の小銃を持ってやった上に、肩を貸したりで大変でした。

間もなく師団全部が南方行きとなり、大連に集結しました時に、内地から四十歳前後の補充兵が来て一緒に乗船しました。

昭和十九年三月十五日、大連を出港して、日本海から瀬戸内海に入り、館山に入港、それから下田を出たと思ったら引き返したりするなど、なか

なか南へ行けません。当時は米軍に制空、制海権の両方を握られてましたから……。

輸送船八隻に巡洋艦が何隻か護衛について、やっと小笠原の父島に到着しました。約一カ月の船の生活でシラミが繁殖し、部隊長以下全員が裸になってシラミ退治に懸命でした。

内地を出て一カ月半かかって目的地パラオ島に到着し、早く荷揚げせねば敵機にやられるというので、全員必死になって荷揚げに従事しました。

果たせるかな翌日早朝からグラマンの襲来です。入れ替わり銃爆撃の連続でした。タコツボを掘り対空射撃で対抗しますがなかなか当たるものではないですね。全く命申しない。せっかく揚陸した食糧も焼かれてしまいました。

零下五〇度のチチハルから熱帯のパラオに連れてこられた内地からの補充兵は、気候の激変に体力がついてゆけず、絶望感に襲われるようになった者が出てくるようになりました。

上陸後奥地に前進するのでジャングルの中を走んでゆく途中、「ダーン！」と前方から爆発音がして「衛生兵前へ！」と怒鳴る声がしてきました。衛生兵である私が飛んで行きましたら首の無い胴体が転がっていました。兵隊は必ず手榴弾一発を携帯していますが、それで自爆死を凶つたのでした。人間の首筋は上が無くなると自然と内側の皮がめくり込むのですね、手の指も飛んで無くなっています。急造担架を作って四人の兵隊に担がせて後送しましたが哀れでした。

内地からの補充兵は年齢四十二歳位でしたが、終戦、引揚げ時には一人も生きていませんでした。全員死んでしまいました。

パラオは海岸が遠浅なので米軍は終に上陸はしなかったのですが、昼間は空爆、夜間は艦砲射撃と連日連夜続けられました。

限られたパラオ島には現地人、内地人、軍隊といたった多くの人が居住していますが、食糧は限られ、現地自活のため農耕、漁撈等が始まりました

が、日に日に栄養失調の患者が増えて、衛生兵の私も病院生活に入りました。

病室の窓から見ると縦横四メートル、深さ三メートルの大きな穴が掘られ、布に包まれた死体が重なっていました。

私は体温計の体温を毎朝報告するのですが、三九度あるのを平熱の三六度と報告して早々に退院して隊に帰りました。隊に帰れば食料はなんとかありますが、病院にいたのでは栄養失調になって穴に捨てられるのが目に見えてますから……。

パラオから船で二時間位のところにペリリュー島があり、水戸の歩兵第二連隊が主力になって防備に当たっていました。米軍が昭和十九年九月十五日に上陸してきました。それでパラオから逆上陸するので、初め一個中隊が成功しましたが、あとの一個大隊は失敗してしまい、結局一万人が全滅して七十日に亘る激戦も終わりました。夜間、南の海上に戦火が望めましたが、戦友の死を

思うと万感胸に迫りました。

内地からの輸送も絶え、二万九千人の陸海軍が米軍上陸に備えて食糧難の中で配備についていたのですが、井上師団長の厳令が守られ、現地住民に迷惑をかけずに通したことは誠に誇るべきことと思っております。現役兵ばかりだったから守るべきものは何としても守るという観念が徹底していたからだと思います。

戦後、私が「群馬パラオ会」の行事として現地慰霊のためパラオ島を訪問すると、当時のことを知っている長老達が口を揃えて、日本軍の軍規厳正を讃えて私達を歓迎してくれるのを見ても、いかに第十四師団の軍規が守られていたかの証拠だと痛感しました。実に誇らしいことだと思いません。

パラオ島の西南海岸から少し離れた海上に軍艦島という無人島がありますが、米海軍が日本の軍艦と見誤って猛烈な艦砲射撃を加え、島の中央が抉られて二つの島になったそうです。

逆上陸作戦の時に作戦部隊についてゆく衛生兵の選抜の時、大阪出身の軍医さんが私を選ばずに三年兵の衛生兵を指名したので私は命拾いしました。その三年兵の衛生兵は帰ってきませんでした。

衛生兵は進級が早いといわれた通り、私も一選抜の上等兵になりましたが、前に申した通り補充がなく、あとが入ってこないのので、内務班では一等兵の古年兵から「上等兵になったと思ってデカイ態度とるな！」とビンタとられる始末でした。

パラオでは人事係の下士官と仲悪く、伍長になれずじまいでした。

昭和二十年に入ると食料事情はますます厳しくなり、ヘビ、トカゲ、ネズミは貴重な蛋白源となり、野生のきのこの皮をむいた白身を、乾パンの缶に釘で穴を細かに開けた代用スリオロシ器で卸して、煎餅状に乾かし固め塩味をつけた変なものを作りました。ところがなかなか評判が良かった

のですが便詰まりになって一騒ぎになり、医務室で調べたら、腹の中の水分を「きのこパン」が全部吸収したのが原因と判り、以後その「きのこパン」は禁止になりました。

農耕班のサツマ芋が年二回採れるようになり、空腹感も幾分緩和されるようになり、現地自活も軌道にのって来ました。

魚獲りの方は漁労班が編成されていましたが、ある時、金子軍曹と矢野一等兵の二人が漁にゆき、手榴弾を発火させて投げようとした時に落としたので、拾い上げて投げようとしたら爆発し、破片が軍曹の胸に刺さって即死、矢野一等兵は右手、腕に重傷を負い、「殺してくれ」と絶叫するのを止血帯で手当てし、病院に緊急収容しました。幸い内地帰還されました。

敗戦、武装解除は中隊毎に自主的に行われ、米軍がトラックで武器を取りに来て船で沖合の海中に投棄しました。

労役をすることも無く、整然と帰国の船を待ち

受けているうちに米軍のリバティ船に乗せられましたが、船内の給与が悪く、米のお粥が飯盒一杯が十人前、昼抜きには腹が減ってどうにもならず、船内では他に食物はなし。空き腹かかえて内地に着く日が待ち遠しくなりませんでした。

途中で三人が死に水葬に附され、浦賀で二人が死亡計五人が故国を目前にして亡くなり気の毒でした。乗船時に今まで着けていた階級章は全部外されました。

昭和二十年十二月二十四日、浦賀に帰りましたが、私はマリアのため前橋陸軍病院に入院、昭和二十一年三月二十五日退院、懐かしの我が家に帰りました。

ペリリュー島の戦争は、米軍提督は「一週間で片付ける」と豪語していたそうですが、案に相違して七十五日もかかり、損害七千八百人を出したそうです。ペリリュー島は飛行場があり、水上偵察機が置かれていたばかりに米軍が目をつけたともいわれています。洞窟に陣地を構えた日本軍に

手を焼き、ブルドーザーで洞窟を埋める作戦で、やっと攻略したと言われています。

高崎は生まれ故郷ですが、想い出すのは昭和九年に北関東陸軍大演習が天皇御親裁の下に行われ、県下の町村あげて観兵式を見物にいったものでした。天皇様の御料車が近づくと「最敬礼！」と号令が掛り、「直れ！」で頭を上げたら御料車は遙か遠くに行っていた事を思い出します。また、野犬狩が行われたことも懐かしい七十年前のことですね。

陛下の御前で体操大会がありました。指揮者が緊張の余り間違えてしまいバラバラの体操になったこと。御行列（鹵簿ろぼと呼称）の先導車が順序を誤って二番目の会場に最初に行つて大騒ぎになり、先導車の運転手と同乗の警官が割腹自殺する騒ぎがありました。

高崎の有名な大観音像は高崎のシンボルですが、高崎連隊の菩提寺ぼだいじでもあり、私は「群馬パラオ会」の世話役となり、現地慰霊団として何回も

パラオ、ペリリューに行つてます。八十、八十七年、現地を一万五千円で軽飛行機をチャーターして空から慰霊をしたこともありすが、現在は独立国になり昔の戦場が観光資源となつてしまつた。

戦争当時の風景を保存する事が観光資源になるのだという考えから、戦時中に埋められた洞窟を掘り出すことは資源が減つてしまうとの観点から発掘は禁止されてしまつて、遺骨の収集は無理になっていきます。洞窟に生き埋めになっている日本兵がいる事が確実なのに手をつけられない現状です、残念ですが……。

当時の山砲陣地や日米戦車の残骸もあります。日本戦車の鉄板が薄くて米軍の三分の一しかありません。

復員した私は父が亡くなるまで家業の建築請負の手伝いをしていました。また私は自分で叩かんと気に入らぬ性格なので、弟子を取らずにやりま

したので、商売下手でもうかりませんでした。

むずかしい仕事程面白いものはありません。前橋に七年、園部に来て四十一年になります。現在、私はやもめ暮らしを十七年間続けております。子供はおりません。

妻は十七年前に右前額部悪性腫瘍（がん）で亡くなりました。六十歳でした。手術五回、眼球の裏にできた「がん」でした。町医者に蓄膿症と誤診されたのが手遅れでした。

パラオ慰霊にもう一度行きたいと思いますが体力が無くなり無理でしょう。